



自分の殻を破る

校長 田邊 雅也

啐啄同時（そったくどうじ）

成長したときに「殻を破る」という言葉をよく使います。「殻を破る」と似た格言に、卵からひなが生まれる瞬間を表す「啐啄同時」という禅宗の教えがあります。「啐（そつ）」は、ひなが内側からたまごの殻をつつくこと。「啄（たく）」は、親鳥が外側から殻をつつくことを言います。ひなは自分のくちばしで、卵の殻をつつき生まれてきます。少しずつ時間をかけて、自分で自分の殻を割っていきます。親鳥はひなのペースに合わせて、応援の気持ちをこめて、外から殻をつついてやります。ところが、ひなが、殻をつつこうともしていないのに、親鳥が先につついて、破ってしまえば、ひなは生きていけません。親鳥と雛のタイミングが合うことで、ひなが卵から出てこられます。

卒業発表会に向けて

「このアイデアはこうしよう。」「これは、私がまとめてくる。」「この部分は、私に任せて。」2月の卒業発表会に向けた6年生の学びの一コマです。2月1日から数えて、卒業証書授与式を含め、残り34回の登校となりました。自分たちの思いをもって、自分たちがやりたいことを、自分たちの方法で真剣に取り組んでいます。最後の授業参観となる卒業発表会に向け、「自分たちの今の思いをお家の方に見せたい。」「小学校生活最後の授業参観を充実したものにしたい。」という切実な思いを感じます。この学びでは、教師は、子供たちが支援を求めたときだけ最低限の手助けをしますが、子供たちの力で進めなくてはなりません。

あしたへジャンプ

「私、こんなに大きくなったんだ。」「こんなことも、できるようになったんだなあ。」これは、2年生の生活科「あしたへジャンプ」での子供のつぶやきです。友達に協力してもらいながら大きな模造紙に、自分の体のラインをとり、等身大の全身の自画像をつくることから始めます。この自画像から、自分と向き合い、友達からもアドバイスをもらいながら、大きくなった自分に気づきます。この「気づき」から、どんな学びへ向かうのかは子供次第です。大きくなった自分に気づいた子供に、教師、家庭は、何をしてあげ、どう見守るべきなのでしょう。低学年の生活科の集大成の学びとして、今、自律的で探究的な学びが展開されています。

ランドセルカバーに反射板

令和5年度の新1年生のランドセルカバーに反射板が取り付けられることになりました。朝霞市子ども議会で、本校の代表児童が提案したことが、この春に実現されるのです。「安心安全に暮らしたい。」「1年生の交通事故をなくしたい。」という朝霞市民の目線から発想した「問い」の実現です。多くの情報から取捨選択し、何度も何度も推敲した提案内容でした。朝霞市の担当者の目に留まり、関係者間で、予算や段取りなど、様々な議論や調整を経て、実現することとなりました。子供の「問い」から、朝霞市民のウェルビーイング（幸せ）を実現しようとする「自律と探究」の学びの成果と言えます。子供、学校、朝霞市が、「問い」や「願い」という殻を一緒に破り、実現したと思うと、とても感動的です。

「自分の殻を破る」という試行錯誤

上記の教育活動は、本校で見られるほんの一例です。「啐啄同時」は、禅宗で、師匠と弟子の呼吸が一致するときに、悟りが得られるという教えが由来のようです。子供の学ぼうとする瞬間を親や教師が適切なタイミングで支援する。これは、「自律と探究」の学びにおいて、大切なのではないかと思います。学校教育も家庭教育も、大人が先回りしすぎて、先に殻を破り、居心地のいい世界を準備し過ぎてはいないでしょうか。子供が自分から殻を破れるよう、見守り、支援し、環境を下支えすることが大人の役目ですが、実際に殻を破るのは子供自身です。3学期の教育活動では、子供も教師も、令和5年度に向けて「自分の殻を破る」という試行錯誤を行っています。大人にとっての「啐啄同時」は、卵をあたため、子供が殻を破る前も、破った後も、忍耐は避けて通れませんが、楽しみながら試行錯誤をしていけたら幸いです。